

The Development of Tateyama Belief in the Edo Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5323

氏 名 福 江 充

本 籍 富山県

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 社博乙第17号

学位授与の日付 平成17年9月30日

学位授与の要件 論文博士（学位規則第4条第2項）

学位授与の題目 近世立山信仰の展開
(The Development of Tateyama Belief in the Edo Period)

論文審査委員 委員長 島 岩
委員 中林伸浩, 中野節子, 森 雅秀

学位論文要旨

1. 主 旨

本論文は、まず幕藩体制下における加賀藩の立山衆徒に対する支配構造を時間軸を定めて捉え、次に芦峯寺一山組織とその衆徒の勸進活動に焦点を置き、具体的には、衆徒の加賀藩領国内外での檀那場形成及び廻檀配札活動の実態と推移、その際に教具として用いられた立山曼荼羅の諸相、さらには地元芦峯寺で行われた布橋灌頂会の実態と推移を検討していくことで、近世における立山信仰の展開について、歴史学の立場から論じたものである。

2. 分析史料

本論文の作成に際しては、芦峯寺や岩峯寺の地方文書を中心に、金沢市立玉川図書館所蔵の加賀藩関係文書や、かつて立山信仰の信仰圏だった諸地域に残る立山信仰関係文書、立山曼荼羅諸本（全41作品）などを用いた。

3. 構 成

本論文は2部構成をとり、第1部は「立山信仰と立山曼荼羅」と題して、次の各章から成り立っている。第1章：もと高野山の学侶龍淵の在地宗教活動、第2章：江戸時代の立山参詣者、第3章：芦峯寺文書に見る布橋と布橋灌頂会、第4章：立山曼荼羅『坪井龍童氏本』について、第5章：立山衆徒の勸進活動と立山曼荼羅、第6章：近世後期における芦峯寺系立山曼荼羅の制作過程についての一試論、第7章：越中立山の地獄信仰と立山曼荼羅に描かれた地獄の風景、第8章：立山山麓芦峯寺の宿坊家と護符、第9章：近世幕末期の江戸における立山信仰、第10章：立山講社の活動。第2部は「近世立山信仰の展開」と題して、次の各章から成り立っている。序章：芦峯寺衆徒の廻檀配札活動に関する研究史と視座・活用史料、第1章：立山山麓芦峯寺宿坊家の檀那帳にみる立山信仰、第2章：尾張国の立山信仰、第3章：信濃国の立山信仰、第4章：房総半島の立山信仰、第5章：江戸時代中期江戸の立山信仰、第6章：幕末期江戸の立山信仰、第7章：立山信仰にみる石仏寄進の一例、第8章：芦峯寺宝泉坊の江戸の檀那場での血盆経唱導、第9章：芦峯寺宿坊家の廻檀配札活動とその収益の行方、第10章：幕末期芦峯寺宿坊家間の檀那場をめぐる争い、第11章：加賀藩領国内の立山信仰、結語。

4. 内 容

4-1. 江戸幕府と加賀藩との間の緊張関係と立山衆徒

江戸時代前期、江戸幕府は大大名の加賀藩前田氏に脅威を感じ、その取り潰しをもくろんで度々牽制した。こうした幕府と加賀藩の緊張関係は、この時期幕府が諸大名に対して強力な支配力を明示するため、数度に渡って国絵図の提出を求めたことから、軍事・資源開発に関わる立山・黒部奥山の国境問題にまで派生し、立山衆徒の宗教活動にも大きな影響を与えた。同領域を対幕府の政策面で重視した加賀藩は、江戸時代初頭、その情報に詳しい立山衆徒を外護した。そして江戸幕府が本末制度に基づいて仏教界全体を支配下に置き、立山衆徒に対しても同様に強力な影響力を及ぼさないように、それ以前に立山衆徒を同藩寺社奉行の支配下に独自に組み込んだ。

4-2. 加賀藩の立山衆徒に対する支配

江戸時代、加賀藩は立山衆徒を藩寺社奉行に組み込み、独占的に支配した。そして正徳元年(1711)、藩公事場奉行の判決で、立山の宗教的権利のうち山の管理権を岩峯寺に、各地での勧進・布教権を芦峯寺に分与した。このように加賀藩は両者に権威面・経済面で対立構造を生じさせ互いに競わせることで、両者が一大勢力になることを避けた。このため、芦峯寺と岩峯寺は宝永6年(1709)から天保4年(1833)までの124年間、互いの越権行為を巡って度々争論を繰り返した。文化・文政期には全国的に庶民の寺社・霊山参詣が隆盛し、立山でも参詣者の庶民化・増大にともなって利権が増大したためか、争論は益々激化した。ただし一連の争論に対しては、加賀藩が藩公事場奉行で裁判を行い、天保4年(1833)に最終的な判決を下し、同藩に都合のよい形で服従させた。こうした加賀藩の巧妙な政策で、芦峯寺衆徒は直接的な山の管理権を失い、加賀藩領国内外での廻壇配札活動や地元芦峯寺での布橋灌頂会を経済的な基盤とせざるをえなかった。なお、文政期から天保期の争論に際しては、当時、もと高野山の学侶龍淵が、立山衆徒の勢力の均等化を図ろうとする加賀藩の意向を背景に、芦峯寺一山の動向を監視するため同地に定住した。芦峯寺は当時、岩峯寺の勧進活動面での越権行為で一山衰退の危機に陥っていた。そのような折、龍淵は芦峯寺に協力し、藩公事場裁判では顧問弁護士的な役割を果たして芦峯寺を勝訴に導いている。その結果、加賀藩の思惑通り、立山衆徒の勢力の均等化が実現されている。

4-3. 芦峯寺衆徒の檀那場形成と廻壇配札活動の実態

立山信仰を「情報」として捉えると、立山信仰史研究の分野は、①「情報としての立山信仰の内容」、②「情報の発信地(芦峯寺・岩峯寺)と発信者(芦峯寺衆徒・岩峯寺衆徒)」、③「情報の受信地(檀那場)と受信者(宿坊家と師檀関係を結ぶ信徒など)」などの要素から成立しているといえる。このうち先行研究では③の分野が停滞しているが、近世における立山信仰の展開について論じる場合、地元の「内なる立山信仰」とともに各地の檀那場の「外なる立山信仰」の両方を総合的に研究していく必要がある。こうした問題に対し、江戸時代に芦峯寺衆徒が日本国内各地で形成していた檀那場及び廻壇配札活動の実態を検討することが、それを可能にする有効な研究方法であると考えた。そこで、芦峯寺の一山会や雄山神社、宿坊家などに残る檀那帳や廻壇日記帳を解説・分析し、これを試みた。

まず地域的な特徴や相違点を明確にするため、①大都市の事例として江戸、②農・山・漁村の事例として三河国、③加賀藩領国内の事例として能登国を検討した。その際、信徒数、信徒の分布、信徒の身分、護符や頒布品、諸祈祷、廻壇配札時の移動、収益、御絵伝(立山曼荼羅)招講、檀那場の規模にみられる差異、勧進方法にみられる差異、廻壇経路にみられる差異などを分析した。その結果、江戸の檀家は、地方の三河国や能登国に比べてかなり少ないものの大名・旗本・商人など経済的に豊かな階層であり、こうした有力な後援者に対しては毎年定期的に訪れ、直接ふれあいながら勧進活動を継続する形をとっていたことを指摘した。一方、地方を廻る場合は、庄屋を定宿と

し、その村で必要とするだけの枚数の護符を庄屋に渡し、実質的な頒布は庄屋に託して移動するという一筆書きのような動きをしたことを指摘した。これに対して江戸では、檀家宅を基地に放射線状に何度も繰り返しながら配札するといった特徴がみられることを指摘した。

次に尾張国・信濃国・房総半島という、先行研究の濃淡が顕著であり、また立山からの距離も大きく異なる三地域での檀那場形成及び衆徒の廻檀配札活動の実態について検討した。その結果、村落部では各村の檀家に対する護符頒布を庄屋に委託していたという共通項とともに、尾張国では檀那場が面としての広がりを持っていたのに対し、信濃国では線・筋から「帯」程度の広がりしか持っていなかったこと、また房総半島では真言宗系の勢力が強い地域に信徒が多かったということなどを指摘した。

大都市江戸での檀那場形成及び衆徒の廻檀配札活動については他地域の事例とかなり異なり、特徴的な点が多いため、宝泉坊・吉祥坊・福泉坊の実例をあげて、詳細な検討を試みた。その結果、護符とともに何種類かの小間物の頒布が見られ、その実は強力な商業活動であったことを指摘した。このうち特に宝泉坊については、江戸時代中期と幕末期の同坊の檀那帳を分析・比較し、中期までは中小商人・職人・新吉原関係者の間で徐々に師檀関係が形成され、後期になると檀那場の成熟とともに幕臣や藩士さらには諸大名・幕閣にまで師檀関係が拡大していく過程を指摘した。また、宝泉坊が江戸の檀家から寄進された姥堂境内六地藏石像を検討し寄進者や寄進年次・寄進目的・寄進額・石造物の製作過程などを明らかにした。さらに、幕末期、宝泉坊が江戸で行った血盆経唱導活動を分析し、その需要層を解明したが、師檀関係を越えて、大名の妻から市井の職人の妻まで様々な身分の女性に向けて行われていたことを指摘した。

この他、加賀藩領国内では、一部の衆徒が特定の檀那場を固定的に形成していた場合と、大部分の衆徒が一山内で何年かに一度行われた籤引きで檀那場を割り当て、変動的な檀那場を形成していた場合を指摘した。

さて、以上のような地域的特徴に視点を置いた分析とは別に、経済的な側面にも着目し、廻檀配札活動で宿坊家が得た収益の行方や宿坊家間の檀那場を巡る争いについても検討した。すなわち、芦峯寺の一部有力衆徒のみへの着目から、芦峯寺一山すべてが順調に廻檀配札活動を行っていたかのように理解する先行研究に対し、不作・天災・火災などを原因とした経済的事情による芦峯寺38軒の宿坊家の階層分解状況（貧富の格差）を指摘し、さらに順調に収益をあげた場合もその多くが半強制的に加賀藩寺社奉行への祠堂金預け入れ（実質は上納）に回された事実を示した。さらに、そうした状況下で芦峯寺の衆徒間に生じた檀那場争論を考察し、一坊＝一国割といった画一的理解の問題点と、争論を解決したものが「芦峯寺一山の評定」による「的確な判断」であったことを指摘した。

4-4. 立山衆徒の勸進活動と立山曼荼羅

立山曼荼羅の構図や図柄は、立山衆徒が展開していった勸進活動の内容に適応したものであると推測した。そこで筆者は、まず芦峯寺文書などから、宝永6年（1709）から天保4年（1833）までの124年間、芦峯寺と岩峯寺の間で度々引き起こされた、立山の宗教的権利を巡る争論の内容を整理・検討し、芦峯寺衆徒と岩峯寺衆徒がそれぞれ加賀藩寺社奉行から認められていた正統な勸進活動だけではなく、不当な勸進活動も含め、実際に彼らが展開してきた勸進活動の概要を捉えた。次に、立山衆徒が展開してきた勸進活動においてみられる立山衆徒の立山曼荼羅に対する意識や、そうした意識の構図や図柄への反映状況、或いは立山衆徒の勸進活動の傾向と立山曼荼羅の現存状況との整合性について検討した。そして、立山曼荼羅の絵解き布教が、山の管理を勸進活動の中核とした岩峯寺衆徒の間でよりも、むしろ諸国での廻檀配札活動を勸進活動の中核とした芦峯寺衆徒の間で発展・成熟したことを指摘した。

一方、芦峯寺系立山曼荼羅諸本に描かれた布橋灌頂会の図柄から、それらの成立時期を考察した。

すなわち、芦峯寺文書から布橋灌頂会の具体的な内容やその変遷を分析し、布橋灌頂会の原初形態が、江戸時代初期に加賀藩の夫人たちによって行われた、プライベート性の強い、橋渡りの逆修儀礼にあること、またそうした儀式内容が、特に文政3年(1820)の布橋の架け替えを境に次第に変化し、もと高野山の学侶龍淵などの影響もあって、真言宗の結縁灌頂の思想や作法が従来の儀式内容を整理するかたちで取り込まれ、布橋の橋渡りをあくまでも中核としながら閻魔堂と姥堂での法要をより重視した完成度の高い法会、いわゆる「布橋灌頂会」として再構成され、文政末期にはほぼ確立したことを指摘した。なお儀式内容が変化したその他の要因については、①芦峯寺一山の組織構成の変化に影響された、②19世紀以降の参詣者の増加に対応しようとした、③芦峯寺の姥堂や布橋などの宗教施設の状態による、④芦峯寺の勧進布教活動の動向と連動する、などの要因を指摘した。こうした論を基盤として、『坪井龍童氏本(原図)』を除く現存の芦峯寺系立山曼荼羅の全てに、確立した「布橋灌頂会」の図柄が描かれているので、これらは全て文政末期以降に制作されたことを指摘した。

この他、江戸時代後期の芦峯寺系立山曼荼羅諸本の過半数以上が、作品相互の模写関係によって成立していることや、立山曼荼羅が日本の地獄絵の系譜の中で最終作品として位置づけられることを指摘した。

4-5. 立山講社の活動

明治時代初頭、金沢藩(旧加賀藩)の神仏分離政策により、岩峯寺・芦峯寺でも強力に廃仏毀釈が行われた。このため、神仏混淆の立山信仰は壊滅的な打撃を受け、急速に衰退したと考えられてきた。しかし、一方、立山への信仰登山者の獲得によって、近世のような賑わいを取り戻そうとする動きがあらわれ、明治13年(1880)、旧立山衆徒によって立山講社が結成された。すなわち立山講社は、明治新政府の政策の影響を受けて崩壊した旧来の立山信仰を中心とする宗教組織を、結社の結成により立山雄山神社信仰の名のもとに再編し、江戸時代に芦峯寺衆徒が諸国で行った廻壇配札布教に基づく講組織や旧縁を復活させ、立山への信仰登山者を獲得していこうとするものであった。本論文では立山講社の結成当時の状況や規約内容、立山教会への改変、立山教会と天台宗禪定講教会への分裂、さらには両者におけるところの県外での宗教活動の実態などを通して、近代の立山信仰について検討した。

Abstract

This dissertation first traces the historical development of Kaga Han control over Tateyama's religious officiants (the *shuto* of the temple towns Ashikura - ji and Iwakura - ji) under the Bakuhan administrative system.

It then focuses on the organization of the Ashikura - ji temple complex and the proselytizing (*kanjin*) activities of its officiants, specifically analyzing the cultivation of parishes, both within and beyond the borders of Kaga Han, and the logistics of amulet distribution in parishes. Also examined is the evolution of Tateyama Mandalas (their content, variations, and production), the visual aids or tools used during these religious activities. Moreover, this study explores the ritual content of the Cloth Bridge Consecration Ceremony (Nunohashi *kanjō* - e) conducted in the town of Ashikura - ji to pray for female rebirth in paradise (*gokuraku ōjō*), and looks at the development of that ritual over time. The evolution of Tateyama belief during the early modern period is studied from the perspective of historical science.

The research for this dissertation is based primarily on surviving historical documents discovered at former inns in Ashikura - ji and Iwakura - ji, as well as those documents related to Kaga Han management of Tateyama

(preserved in the Kanazawa City Tamagawa Library) and documents concerning Tateyama belief in other localities. It is also based on the study of forty - one surviving Tateyama mandalas.

論文審査結果の要旨

本論文「近世立山信仰の展開」は、芦峯寺衆徒の勧進活動に焦点をあてて、衆徒による全国各地での檀那場形成および廻壇配札活動の実態とその推移を明らかにすることを通して、近世立山信仰の展開について論じたものである。すなわち、立山信仰を構成する要素には、

1. 情報としての立山信仰の内容（立山曼陀羅や布橋灌頂会など）
2. 情報の発信地（芦峯寺と岩峯寺）と発信者（芦峯寺衆徒と岩峯寺衆徒）
3. 情報の受信地（檀那場）と受信者（宿坊家と師檀関係を結ぶ信徒など）

の三つが考えられるが、このうち、これまでほとんど実態が明らかにされてこなかった、第三の要素に関する考察が、本論文の中心であり、かつ、最も独創性の認められるところである¹。

本論文は二部からなるが、まず第一部では、立山信仰の内容について紹介されている。

第一部「立山信仰と立山曼陀羅」について すなわち、

1. 立山信仰において仏教僧が果たした役割に関して — 「もと高野山の学侶龍淵の在地宗教活動」（第一章）
 2. 立山参詣者に関して — 「江戸時代の立山参詣者」（第二章）
 3. 布橋灌頂会に関して — 「芦峯寺文書に見る布橋と布橋灌頂会」（第三章）
 4. 立山曼陀羅に関して — 「立山曼陀羅『坪井龍童氏本』について」（第四章）、「立山衆徒の勧進活動と立山曼陀羅」（第五章）、「近世後期における芦峯寺系立山曼陀羅の制作過程についての一試論」（第六章）、「越中立山の地獄信仰と立山曼陀羅に描かれた地獄の風景」（第七章）
 5. 護符に関して — 「立山山麓芦峯寺の宿坊家と護符」（第八章）
- 等である。

第二部「近世立山信仰の展開」について 次に第二部では、第一部の立山信仰の内容を前提として、芦峯寺衆徒による全国各地での檀那場形成および廻壇配札活動の実態とその推移について論じられる。その際に、主な資料として用いられているのは、宿坊家に保管されたきた檀那帳であり（第一章「立山山麓芦峯寺宿坊家の檀那帳にみる立山信仰」）、この檀那帳をもとに、実態が明らかにされた地域は、以下の通りである。

1. 尾張の国 — 「尾張の国の立山信仰」（第二章）
2. 信濃の国 — 「信濃の国の立山信仰」（第三章）
3. 房総半島 — 「房総半島の立山信仰」（第四章）
4. 江戸 — 「江戸時代中期の江戸の立山信仰」（第五章）、「幕末期江戸の立山信仰」（第六章）、「立山信仰にみる石仏寄進の一例」（第七章）、「芦峯寺宝和泉坊の江戸の檀那場での血盆経唱導」（第八章）

そしてその結果、以下のような諸点が、新たに明らかにされた。

1. これまでは、三河地方の事例をもとに、檀那場が面として（すなわち一つの地域全体が檀那場となっている）とらえられてきたが、信濃の国の事例のように、線あるいはせいぜい帯程度の広がりしか持ちないものも、存在していた点。
2. 大都市江戸での檀那場形成および廻壇配札活動は、他地域とは異なり、商業活動の一環（たとえば、護符とともに小間物を頒布するなど）という側面が強く現れている点。
3. 江戸においては、師檀関係が、江戸中期の中小商人・職人・新吉原関係から、江戸後期には幕臣や諸大名・幕閣までへと、拡大していくという推移が認められる点。

4. 芦峯寺が加賀藩領外での勧進活動を展開した背後には、立山の管理権を岩峯寺に、各地での勧進・布教権を芦峯寺に分与して、両者を競わせることで立山地域の分割統治をはかった、加賀藩の統治政策が存在した点。

まとめと評価

以上、宿坊に保管されてきた檀那帳という資料を掘り起こして、それを丹念に読み解きながら、芦峯寺衆徒による各地での檀那場形成および廻壇配札活動の実態とその推移を、実証的に明らかにした福江論文は、細かい点では、「源三郎」と檀那帳に記されているところを「弥重郎」と読み違えたりというような誤りが認められるところ（第一部、p.223）や、大きなところでは、立山信仰の内部に入り込みすぎて、かえって立山信仰の独自性が見えにくくなっているところ²も認められるが、十分に博士論文の水準に達しており、審査員一同、合格と判定した。

¹この第三の要素に関する研究としては、これまでのところ、三河地方における檀那場形成および廻壇配札活動の実態を明らかにした、寺口けい子氏の「芦峯寺善道坊諸国檀那廻りの実態」『富山史檀』67、1977および「立山信仰と布教活動」『富山県史』通史編IV近世下、1983が、存在するのみである。

²つまり、白山信仰の広がり方や出羽三山信仰の広がり方との比較という視点があれば、もっとその特徴が明らかになっただろうと思われるということである。